

## 『真面目が大切』の一考察

—分身というテーマの持つ意味—

千代田 友久

(東洋大学講師)

『真面目が大切』において、ジャックは田舎では自分の名前はジャックであるといい、都会に出るとアーネストであるという。アルジャンノも同様に都会ではアルジャンノだが田舎ではアーネストであるという。アルジャンノによれば、こういう生活の仕方はバンベリズムというのであるが、自分のほかにもう一人の自分がいるという設定はドッベルゲンガー、すなわち分身の主題を思い出させる。周知のように、それは19世紀の文学作品にしばしば見出すことができるが、一般に名前や声や服装といった細部に至るまで主人公に瓜二つの似姿が登場し、その分身は本人の行動を妨げ、女性をめぐる破局に向かわせ、本人を自殺に追い込むなどする。分身には死の意味作用があり、それ自体には恋愛能力がない。

『真面目が大切』におけるジャックとアルジャンノの分身は、もちろんそうした分身と同じではない。ジャックの分身のアーネストもアルジャンノの分身のアーネストも本人に対して危害を加えるわけではない。また、本人と分身が戦うこともない。分身は本人が本名では享受することができない快樂を本人に与えるために作り出された存在であり、本人と分身の間に対立関係はない。ジャックとアルジャンノは彼らの本名では叶えることができない夢を分身のおかげで実現することができそうになるが、それはあくまでも本人が分身として存在できる空間に限定される。本人が分身として存在できない場所に身を移せば、夢は破れるしかない。グエンドレンとセンリーは名前がアーネストの人と結婚したいという。ジャックとアルジャンノは分身の名前こそアーネストであるが、本当の名前はアーネストではない。こうして、ジャックとアルジャンノは分身の持つ魅力と幻滅を味わうことになる。

結婚の条件としては普通社会的な地位であるとか財産などが考えられる。名前がアーネストの人と結婚したいというグエンドレンとセンリーの条件はやや変わっているといえるかも知れない。しかし、それを笑うことができるだろうか。ナンセンスであると片付けることができるだろうか。彼女達はなぜ名前にこだわるのだろうか。あるいは名前とは一体何なのだろうか。彼女達の条件はこのことを気付かせる。そして、この芝居の結末を考えると、この問いは重要な意味を持っていることがわかる。ジャックはアーネストという名

前の分身を作り出すことによって人生を楽しんでいる。そして、その名前のおかげでグエンドレンと結婚ができそうになる。しかし、彼女はジャックの名前がアーネストであると思うからこそ彼と結婚しようとするのである。ここで、ジャックは窮地に陥る。我々の興味は彼がこの窮地をどう脱するかということに集まる。ワイルドはこれに意外な結末を与えた。すなわち、ジャックの本当の名前がそれである。

この芝居の最後のところで、ジャックは自分の本当の名前がアーネストであり、アルジャンノンの実の兄であることを知る。ブラックネル夫人の甥であることもわかる。父も母も知ることができる。ジャックにとって名前がわかるということは家族の絆が回復するという重大な意味を持っているのである。名前とは通常ありふれたものであり、普段は特別に有難みを感じさせるものではない。しかし、実はそれは我々が何者であることを証明してくれるものであることがわかるのである。このように考えると、グエンドレンの条件は我々に大きな問題を投げ掛けているのだということがわかる。

『真面目が大切』には自分の素性がわからなくなった時の悲しみや辛さと、それがわかった時の喜びが描かれている。分身というテーマには一般に不気味なイメージがあるが、この芝居はジャックの本当の名前がわかることで幸福な結末に導かれる。また、そこに至る過程で、我々は人生について様々な問題、とりわけ人間にとって自己の存在を証明してくれる最も基本的な形態である家族について考えさせられることになる。そして、これが『真面目が大切』という芝居を我々の感情の最も深いところに触れる力をもった作品にしているのである。

